

若い母親の養育態度と親子（幼児）の性格認知

——実父母との似より感をベースにして——

秋 山 幹 男

The Relationship between Young Mother's Rearing Attitudes and The Cognition of Self and her Infant children's Personality

——An Analysis based on Perceived Similarity of Mother and her Parents——

Mikio Akiyama

「頭が動く」ということは、誠にもって不思議な出来事ではある。まとめる作業に入り出すと、「アッそうか」で片付けられるけれど、その突然とも思えるような閃き（ほとぼしり）の開始は、驚きに値する。1994年の「親子の似より」研究の現状とそのパースペクティブでは、まだまだ未熟ではあったが、自分なりの理論構築へ向けての土台づくりを試みた。

それから、6年の時間が経過した。頭の中はあまり動かず、『親子の似よりとズレ』ともう一廻り大きな『似よることとズレること』というキーワードの周辺をただただグルグルまわっていた。動き出すきっかけとなった一つは、1999年の論文に対する鈴木順和氏の指摘である。「この概念は面白いが、ネーミングに難がある。『同一視』なり『同一性』なりのように、魅力的な命名にするともっと取り上げられる概念になるかもしれない」というものであった。二つ目は、以前録画したままになっていたテレビ番組を観ることによってであった。1997.1.4.放送のNHK教育：未来潮流「自分とは何か？—生命哲学が問い掛けるもの—」がそれであり、インタビューは哲学者中村雄二郎である。多田富雄（免疫学）「免疫的自己の衝撃」、高久富麿（遺伝子医学）「遺伝子のつげる未来」、久保田 競（脳生理学）「脳はどこまで自分か」と会話が続き、最後にマーヴィン・ミンスキー（人工知能研究）「機械として生き続ける自分」の時であった。「脳こそ人間である」、「文化は、脳から脳への伝達である」という主義の科学者であったが、コンピュータの中で生き続ける人工生命を生み出した人として紹介された。コンピュータ・サイエンスが追い求める「自分」の概念化に触れた時、突然の閃きが起きたのである。「自己」はないのだ、identityという概念は間違っている」という彼の応答と、積木様の形の組み合わせ人工生命体がいろいろな姿態で動めくスクリーンを見つめている時に結び付いたのである。『似よることとズレること』というところまで構築してきたキーワードが、もっと広い多様性・多義性をもって動き出したといえるのである。これは、Erikson, E.H./Jung, C.G./Frankl, V.E./Maslow, A.H./van den Berg, J.H./Buber, M./Vaillant, G./河合隼雄/霜山徳爾/鯨岡 峻/村瀬 学/木村 敏/横山絃一/岩田慶治/内山興正/西平 直/早坂泰次郎/春日 喬の考え方に触れながら、これまで少しずつ融合化させてきたものが、この瞬間に結び合ったといえようか。

いまもう一つの古くて新しい課題は、1968年の修士論文で取り上げたものである。白ネズミを被験体にして回避反応の消去期分析をした折りの考察として“Solomon説”に修正を加えた

ことである。それは、情動反応における CR 生起閾値の導入であった。これは、1999 年の論文で再び浮上化させることができた。この『生起閾値』という考え方は、親子の似より感研究（認知レベル）を支えてくれる情動レベルでの重要な概念となるであろう。また、もっと広範囲に応用可能な概念として、これから大いに活用したいと考えているところにまで到達してきた。これは、今後の研究において、認知に情動が付随し、ある意志が意味を持ち始めると、行動へと連動していくというプロセスの解明と、臨床分野への応用に結び付けていけるはずである。

「似よること」と「ズレること」については、発達の面から捉えてきている。これまでは、心内化プロセスと継承化プロセスという 2 つの側面からデータをまとめ、学会発表や論文化に努めてきた。ただし、まだ現状は親子の似より感（ズレ感）の分析段階に留まっている。心内化プロセスの方は、七区分表示法によって抽出された似より感 3 群（大群・中群・小群）による追跡研究で、28 年目をむかえる。ずっと女子青年（大学生）を対象にした詳細なる分析をしてきたのであるが、そこには一貫して似より感大群のプラス的特徴が他の 2 群との比較からクローズアップされ続けてきた。今からは、残された中群と小群の中味にもう一步踏み込むという所にまで追究の手を伸ばしていきたい。筆者の研究は、Erikson 流人生周期の視座と Jung, C.G. の「個性化」という人格形成の考え方に立って推し進められている。

今回の研究は、もう一つの継承化プロセスに焦点を当てたものである。これまでこの線に沿ってまとめたものは 3 編ある。1984 年では、わが子（幼児）に対する両親の養育態度と性格認知を、きょうだい数・出生順位・性別構成ごとに分けて分析した。14 の幼稚園・保育所に協力を依頼し、父親と母親のデータを 1300 組回収した。1. 調査全体からみた男女児の比較、2. きょうだい数からみた比較、3. 出生順位からみた比較、4. 性別構成（二人きょうだいの場合）からみた比較と、粗いけれども細かい追跡を試みた。特に、分析 4 の同性ペアの第一子と第二子の比較からは（ χ^2 検定によったのだが）、まだ幼いわが子なれどかなりはっきりと性格的な区別を両親がしていることが改めてはっきりと分かった。1987 年の論文は、8 つの幼稚園・保育所から回収できた母親 448 人分のデータをもとにした。それまでに挙げてきた中から 30 の性格項目を選び出し、分析がなされた。これは、母親を対象にして、子ども・自分・夫の性格を求めたものであるが、（子-母-父）の関係のなかで、子どもの性格を的確に捉えるための方法を探ってみたものである。しかしながら、30 の項目を一つひとつ分析対象にしたため、スッキリしたものにはならなかった。この二論文は、因子分析法を用いる以前の取り組みであった。3 番目の女子学生とその両親との性格の相互認知をみた 1999 年の論文以外は、「似より感」という大きな見通しに立って考察がなされたとはいえ、試行錯誤的狀況下での分析であったと言ってもよい。

女子学生がみた「自己-母親-父親」の項目は、1985 年に 4 つの因子が取り出され、以後この人格因子でまとめてきている。一方、母親がみたわが子（幼児）の性格項目についても因子分析を試み（1989）、5 つの因子を抽出した（CF1 陽気、CF2 わがまま、CF3 おく病、CF4 ねばり、CF5 おっとり）。その後 CF3（3 項目）を外し、4 つの因子は各々 6 項目に統一整理されて調査に用いている。

若い母親の実父母との「似より感」（または「ズレ感」）をもとに群分けをし、彼女達の養育態度ならびに親子（幼児）の性格認知について調べ上げたものが、今回の研究である。これは、3 回の学会発表をした後に練り上げ、はっきりとした見通しをもって論文化に持ち込んだものである。

本研究の目的は、① 若い母親と実父母の似より感をもとにした3群が、わが子（幼児）に対する養育態度と親子の性格認知にどのようにかわってくるかを明らかにするものである。

② ①をまとめ上げながらたどり着いた現時点での自分なりの理論が、どこまで煮詰まってきたかを取り上げてみる。

方 法

対象者 3～6歳の幼児をもつ母親291名（男児の母146名、女児の母145名）。362名の回収があったのであるが、母親の両親が調査時に健在で、彼女が18～27歳（大学時代から社会人時代）の間に実母が50歳を迎えた人に限定した。これは、0～15年以内のうちに実母がその年齢に達した人を対象にしたことになる。母親の年齢の幅は、26～40歳であった。

調査の実施園 広島市とその近郊にある3つの幼稚園に協力を依頼した。

実施期日 1986年9月。調査用紙を持参し、回収の知らせを待って受け取りにでかけた。粗方の集計整理ができた時、その結果をまとめて園児全員の数だけ揃えて再度訪問し、報告書を園長に手渡した。

実施内容と処理 調査1 母親（自分）と実父母に対する性格項目は、4つの因子とその他を含んだ56項目である。母親のみたわが子の性格認知の項目数は48項目。二つの調査とも5件法で回答してもらった。

母親の56項目

MF1. 内向性：しよげやすい 臆病な 感傷的な 意志の弱い 甘えた ロマンチックな 行動力のある（-） 他人を気にする 指導力のある（-） スケールの大きな（-） 内気な 服従的な MF2. 自己顕示性：利己的・自己中心的な 支配欲の強い 強がり うぬぼれの強い わがままな ひねくれた 頑固な 虚栄心の強い 粗暴な MF3. 誠実性：礼儀正しい ねばり強い 几帳面な ひたむきな ものを深く考える 包容力のある 正義感の強い 献身的な 親切な やさしい なげやりなところのある（-） 無責任な（-） あきっぱい（-） 調和のとれた MF4. 明朗性：明るい ユーモアのある 友人の多い さっぱりした 冒険好きな 未来に大きな希望をもつ 孤独な（-） その他：しつと深い（F1/F2） 不安定な（F1/F2） 神経質な 疑い深い 理想主義的な ヒステリックな 趣味の広い 生き甲斐を感じる 素直な ニヒルな 体の強い 独立心の強い 宗教的な 古いものの考え方をする

母親がみた子ども（わが子）の48項目

CF1. 陽気：陽気な（.75） 明るい（.70） 友人の多い（.71） にぎやかな（.61） 表情の豊かな（.61） 積極的な（.60） /データ処理の折削除した項目……さっぱりした（.54） 冒険好きな（.47） おしゃべりな（.53） CF2. わがまま：わがままな（.71） 利己的な（.66） 支配欲の強い（.64） うぬぼれの強い（.55） 短気な（.54） 強がり（.47） /データ処理で削除……甘えた（.42） がん固な（.44） 依頼心の強い（.43） CF3. おく病：おく病な（.46） 慎重な（.44） /やさしい（.41） ……3項目ともデータ処理はしない。CF4. ねばり：ねばり強い（-.68） 集中力がある（-.65） 意欲的な（-.53） ひたむきな（-.43） 注意力のある（-.44） ……マイナスの因子負荷であるが、「ねばり」として得点化した。CF5. おっとり：おっとりしている（.65） とろい（.60） 頼りない（.52） 服従的な（.50） 目立たない（.47） ひかえめな（.47） /データ処理で削除……意志の弱い（.40）

データ処理の仕方は、2通りある。一つ目は、実父母との似より感を3群に分けることである。このためには、Fig.1の七区分表示法を用いる。5件法の回答をはい？いいえの3件法に変換し、区分③に入った「はい」か「いいえ」で判断された項目の数で操作的に仕分けられた。二つ目は、5件法で出た得点をそのまま用いて、4つの因子ごとの平均因子得点を求める。最高得点は5.00、最低得点は1.00となる。

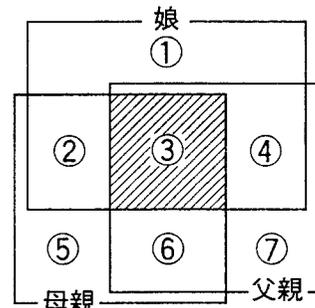


Fig.1 七区分表示図

調査2 母親の養育態度をみるものである。保護・服従・拒否・支配の4つの養育態度は、各々10項目で構成されている。評定は、「はい」「時々は」「いいえ」

の3件法である。はいを2点、時々は1点、いいえを0点として計算される。データの処理に当たっては、これまで一貫して服従は平均得点が低く、今回も同じような結果となったので削除することにした。また、残りの3つについても、一つひとつの項目の得点の出具合いをみただで各々2項目ずつ減らし、8項目で得点化することにした。最高16点、最低は0点となる(資料参照)。

似より感3群の現れ方をみるために、今回は養育態度も性格認知も4×4のマトリックス表を用いることにした。この作成は、母親のMF4 明朗性 MF2 自己顕示性と、母からみた子どもの性格 CF1 陽気 CF2 わがままを取り上げた。その理由は、自分と自分の子どもの性格を比較した場合、発達的にみてお互いに共通した性格であるという受け止めをしたからである。そこで、各々の得点を平均値以上と未満に仕分けし、HとL(母親) hとl(子ども)とする。そうすれば4×4の組合せができる。この分析の方法は、白ネズミに往復回避反応を学習させ、消去法を挿入した後の消去期の分析をした時に工夫し用いた方法の応用である(1975)。

結果と考察

研究の対象である母親の年齢は、30歳前半の人が61.6%を占めている。後は、20歳後半22.3%30歳後半が15.4%であった。(父親の年齢は、30歳後半51.5%、30歳前半39.2%、20歳後半4.8%そして40歳前半が4.5%である。)子どもの年齢は、5歳児38.3%、4歳児35.9%、6歳児21.0%残りの4.8%が3歳児で構成されていた。母親の実母と実父の年齢構成は次の通りである。

実母：50歳後半44.0%、60歳前半36.1%50歳前半16.2% / 実父：60歳前半36.8%、50歳後半31.3%、60歳後半21.6%

母親の出生順位は、①/2(二人きょうだいの第一子)23.7%、②/221.3%、③/313.1%、②/312.7%、①/311.3%、①(一人っ子)5.5% 4人きょうだい以上12.4%となっている。母親の評価の対象となった子どもの出生順位と性別は、①/236.4%(男児47人女児59人)、②/228.2%(男児42人女児40人)、②/311.3%(男児19人女児14人)、①/3と③/3は、8.6%と8.2%(合わせて男児27人女児20人)、一人っ子5.2%であった。

母親が捉えたわが子の性格をみると、マトリックス表を構成するCF1 陽気とCF2 わがままという認知面において興味ある特色がでてきた。hl/ll/hh(陽気・わがままでない/陽気ではない・わがままでない/陽気・わがまま)では、第一子(含、一人っ子、①/2、①/3)が42.4%、第二子が40.4%とほぼ同数なのに対して、母親からマイナス的に受け止められたlh

（陽気ではない・わがまま）の子は、第一子が69.2%，第二子25.0%（性別では、男児15人女児21人）となり、前者にウエイトがかかっている。

1. 母親と子どもの4つの性格の出方について

Tab.1-1 は、4つの性格の平均値とSDである。Tab.1-2 は、母親の MF4 明朗性と MF2 自己顕示性の出現数を子どもの性格からみたもの、子どもの CF1 陽気 CF2 わがままを母親の性格別にみたものである（人数，%）。母親がみる自分と母親が捉えた子どもの性格を見比べてみると、その判断の仕方には一定の傾向のあることがよく分かる。それは自分に似せた捉え方である。

Tab.1-1 4つの性格の平均と（SD）

母親	\bar{X}	(SD)	(母→) 子ども	\bar{X}	(SD)
MF4 明朗性	3.33	(0.61)	CF1 陽気	3.65	(0.62)
MF2 自己顕示性	2.64	(0.51)	CF2 わがまま	2.79	(0.66)

Tab.1-2 性格別にみた出現数（人と%）

MF4 明朗性					MF2 自己顕示性			
子	1・2 hl	ll	hh	lh	hl	ll	hh	lh
(H)	53 61.6%	30 43.5	54 64.3	14 26.9	28 32.6%	26 37.7	58 69.0	30 57.7
(L)	33 38.4	39 56.5	30 35.7	38 73.1	58 67.4	43 62.3	26 31.0	22 42.3

CF1 陽気					CF2 わがまま			
母	42 HL	LL	HH	LH	HL	LL	HH	LH
(h)	52 68.4%	32 43.8	55 73.3	31 46.3	24 31.6%	24 32.9	44 58.7	44 65.7
(l)	24 31.6	41 56.3	20 26.7	36 53.7	52 68.4	49 67.0	31 41.3	23 34.3

(H). (h) : 平均値以上の得点 上段 : 人数
(L). (l) : 平均値以下の得点 下段 : %

2. 4×4マトリックス：16領域からみた母親と実父母の似より感3群の現れ方

Tab.2 は、16の領域別にみた似より感3群の出現数（人）である。まず全体的に眺めてみると、親子が似ているとみている領域1, 6, 11, 16（右下がりの対角線上）は、出現率41.6%を占める。反対に似ていないとみている領域4, 7, 10, 13（左下がりの対角線上）では、13.4%と少ない出現であった。母親がHL（明朗で自己顕示性は高くない）の場合、似より感大群の母親は小群の親に比べると、3.37倍の出現である。これに対し、LH（明朗でなく自己顕示性が強い）では逆に小群の方が大群より5.78倍の出方をしていた。

Tab.2 16 領域別にみた似より感3群の出現数

(人)

母親 MF4・2 母→子 CF1・2	42 HL	LL	HH	LH	(母→) 子ども 計
12 hl	1 大 20 中 13 小 2 35	2 大 10 中 10 小 3 23	3 大 4 中 11 小 3 18	4 大 1 中 8 小 1 10	大 35 44.9% ← 中 42 31.0 3.7倍 小 9 12.3 →
11 ll	5 大 8 中 6 小 3 17	6 大 8 中 13 小 5 26	7 大 1 中 5 小 7 13	8 大 0 中 8 小 5 13	大 17 21.8% 中 32 22.9 小 20 27.4
10 hh	9 大 4 中 9 小 4 17	10 大 1 中 5 小 3 9	11 大 8 中 19 小 10 37	12 大 2 中 8 小 11 21	大 15 19.2% 中 41 29.3 2.0倍 小 28 38.4 ←
13 lh	13 大 4 中 2 小 1 7	14 大 3 中 9 小 3 15	15 大 2 中 3 小 2 7	16 大 2 中 11 小 10 23	大 11 14.1% 中 25 17.9 小 16 21.9
母親 計	大 36 46.2% 中 30 21.4 小 10 13.7 76	大 22 28.2% 中 37 26.4 小 14 19.2 73	大 15 19.2% 中 38 27.1 小 22 30.1 75	大 5 6.4% 中 35 25.0 小 27 37.0 67	N = 291 (大 78) (中 140) (小 73)

一方、母からみた子どもの性格認知では、hl（陽気だがわがままではない）という受け止め方は、大群の母に多く、小群の3.7倍（中群は2.5倍）であった。hh（陽気だがわがままである）とわが子を見る傾向は、小群の母親に多く大群の2.0倍であった。母親のLLは、HLの方に、HHの場合はLHの方にズレている。これは、MF2自己顕示性の要因が大きく関与していることを示している。子どもの場合は、それほどはっきりとはしないが、CF2わがままにおいてhという判断をされる時は、小群に多くなるとはいえそうである。

領域を一つひとつみていくと、領域1, 2, 5, 6, 11 / (3), (9), (13) で大群の人数が多い（大群内での占有率84.6%）。領域12, 11, 16, 7 / (6), (8), (9) では小群（占有率71.2%）、中群の出方は領域11, 1, 6 / (3), (16), (2)（占有率55.0%）となっている。重複した領域を除いて出現数をみると（大群 vs. 小群）、大群は、領域1, 2, 5, (13) を、小群では、領域12, 16, 7, (8) を占めている。

3. 4×4マトリックス：養育態度について

Tab.3-1 は、3つの養育態度についての全体の平均とSD / 領域別の平均とSDを表したものである。3つの養育態度ともに低い得点を出している（この様な形式の調査では好ましいとされる接し方をしている）領域は、1, 2, 5, 6, 9 であった。反対に、3つとも高い得点をだしている（好ましくない接し方である）領域は、13, 15, 16 となったが、領域13と15の出現人数は共に7人と少数であった。全体の平均値通りだがやや高い得点であったものも含めてみるとさらに領域3, 4, 7, 8, 12 がこれに該当する。領域1（領域11）の保護、領域14の支配が低得点であった。

Tab.3-1 3つの養育態度の領域別の平均と（SD）

母親 母→子	42 HL	LL	HH	LH	
hl	1 保 6.1 (2.7) 拒 5.2 (2.0) 支 5.5 (2.9)	2 保 6.1 (2.7) 拒 6.2 (2.5) 支 4.5 (3.0)	3 保 6.9 (2.1) 拒 7.3 (2.0) 支 7.1 (3.2)	4 保 8.3 (1.3) 拒 6.8 (2.7) 支 8.2 (3.8)	
	ll	5 保 6.1 (2.9) 拒 5.9 (2.3) 支 4.1 (2.3)	6 保 6.2 (2.1) 拒 6.6 (2.5) 支 5.4 (2.7)	7 保 6.8 (2.9) 拒 8.0 (2.1) 支 7.0 (3.9)	8 保 7.8 (2.3) 拒 7.6 (3.1) 支 6.1 (4.4)
		hh	9 保 5.4 (2.8) 拒 4.7 (2.5) 支 4.7 (1.9)	10 保 6.2 (2.2) 拒 9.0 (2.9) 支 8.2 (2.9)	11 保 6.2 (2.5) 拒 6.9 (2.4) 支 6.1 (3.0)
lh			13 保 8.6 (1.0) 拒 8.0 (1.6) 支 7.0 (2.0)	14 保 7.5 (2.7) 拒 6.9 (2.3) 支 5.3 (2.9)	15 保 8.9 (2.0) 拒 9.0 (2.7) 支 8.1 (2.4)
	N = 291		保護	拒否	支配
	\bar{X}	6.8	6.8	5.9	
SD	2.6	2.6	3.2		

Tab.3-2 平均得点の出方

保護				
	HL	LL	HH	LH
hl	(6.1)	(6.1)	(6.9)	8.3
ll	(6.1)	(6.2)	(6.8)	8.1
hh	(5.4)	(6.2)	(6.2)	7.8
lh	8.6	7.5	8.9	7.5
拒否				
	HL	LL	HH	LH
hl	(5.2)	(6.2)	7.3	(6.8)
ll	(5.9)	6.6	8.0	7.6
hh	(4.7)	9.0	(6.9)	7.5
lh	8.0	6.9	9.0	8.0
支配				
	HL	LL	HH	LH
hl	(5.5)	(4.5)	7.1	8.2
ll	(4.1)	(5.4)	7.0	6.1
hh	(4.7)	8.2	6.1	(5.8)
lh	7.0	(5.3)	8.1	6.3

Tab.3-2 は、養育態度別に平均得点を示したものである。網かけで示した領域はかなり高い値を、○をつけたのは平均値付近の値、() はかなり低い値を示している。似より感大群の母親は、好ましい養育をしているとみる人が多く、小群の場合は、干渉のし過ぎあるいはマイナス的で、好ましいとは思えないような態度認知をしていると言えようか。保護と拒否の得点が共に高いというアンビパレントな態度／拒否と支配が高いといったようなかなりしんどい接し方をしている領域もここでは浮上ってきている。

特に注目したい領域は13である。ここに入った母親は7人と少ないのだが、そのうち4人は大群である。大群の母親といえども自分と性格がまったく逆と判断した時には、3つの態度の得点が高くなってくるのである(HL/lh)。4×4のマトリックス表を用いることで似より感と養育態度の関係はより深く追究できると言ってもよからう。

4. 4×4マトリックス：自分と自分の子どもの性格認知

Tab.4-1 は、全体の MF1 内向性 MF3 誠実性/CF4 ねばり CF5 おっつりの平均とSD、16の領域における各々4つの性格の平均とSDを示したものである。中央の横線の上に記入された数値は、マトリックスを構成している MF4・MF2/CF1・CF2 の値を記し、下には残りの MF1・MF3/CF4・CF5 の値を載せてある。分散分析の処理後、多重比較(ライアン法) P<0.05 で有意差を求めた。上下の比較は実線で、左右の比較は破線で示してある。たくさんの数値が記載されているため、一見した時乱雑で難しそうに受け止められそうだ。しかし、じっくり16領域を眺めると、4つの性格認知の関係性が見えてくるし、似より感3群とのかわり方、さらには養育態度との密接な結び付きの姿が、マトリックス表を見比べることにより垣間みえてくる。

Tab.4-1 母親と母親のみた子どもの性格認知 平均値と (SD)

母親 母→子	HL	LL	HH	LH		
hl	1 MF4 3.9(0.3) CF1 4.1(0.3) MF2 2.3(0.3) CF2 2.3(0.4) MF1 2.9(0.3) CF4 3.5(0.5) MF3 3.6(0.4) CF5 2.5(0.4)	2 MF4 3.0(0.3) CF1 4.1(0.3) MF2 2.3(0.3) CF2 2.1(0.4) MF1 3.2(0.5) CF4 3.5(0.3) MF3 3.3(0.3) CF5 2.4(0.6)	3 MF4 3.9(0.2) CF1 4.0(0.4) MF2 3.0(0.3) CF2 2.2(0.2) MF1 3.0(0.4) CF4 3.3(0.4) MF3 3.4(0.4) CF5 2.5(0.6)	4 MF4 3.0(0.2) CF1 4.1(0.3) MF2 3.2(0.4) CF2 2.1(0.4) MF1 3.4(0.3) CF4 3.5(0.3) MF3 3.5(0.3) CF5 2.4(0.6)		
	ll	5 MF4 3.7(0.2) CF1 3.2(0.4) MF2 2.3(0.2) CF2 2.4(0.2) MF1 2.9(0.4) CF4 3.1(0.6) MF3 3.2(0.4) CF5 3.0(0.6)	6 MF4 2.7(0.5) CF1 3.0(0.4) MF2 2.2(0.4) CF2 2.2(0.4) MF1 3.5(0.5) CF4 3.1(0.5) MF3 3.2(0.5) CF5 3.0(0.6)	7 MF4 3.8(0.4) CF1 3.1(0.3) MF2 3.0(0.4) CF2 2.4(0.2) MF1 3.1(0.5) CF4 3.2(0.6) MF3 3.2(0.4) CF5 3.4(0.4)	8 MF4 2.7(0.3) CF1 2.7(0.4) MF2 3.0(0.4) CF2 2.3(0.3) MF1 3.4(0.4) CF4 3.0(0.4) MF3 3.2(0.2) CF5 3.4(0.6)	
		hh	9 MF4 3.8(0.4) CF1 4.2(0.3) MF2 2.3(0.2) CF2 3.3(0.5) MF1 3.0(0.5) CF4 3.1(0.5) MF3 3.5(0.3) CF5 2.2(0.5)	10 MF4 2.9(0.3) CF1 3.9(0.4) MF2 2.3(0.2) CF2 3.4(0.3) MF1 3.6(0.3) CF4 2.9(0.7) MF3 3.2(0.4) CF5 2.5(0.6)	11 MF4 3.8(0.3) CF1 4.2(0.4) MF2 3.1(0.4) CF2 3.4(0.4) MF1 3.1(0.5) CF4 3.2(0.5) MF3 3.3(0.5) CF5 2.4(0.6)	12 MF4 2.8(0.4) CF1 4.0(0.3) MF2 3.0(0.4) CF2 3.4(0.5) MF1 3.4(0.4) CF4 3.2(0.5) MF3 3.0(0.5) CF5 2.5(0.4)
			lh	13 MF4 3.6(0.1) CF1 3.4(0.2) MF2 2.3(0.2) CF2 3.2(0.2) MF1 3.1(0.3) CF4 3.6(0.4) MF3 3.7(0.3) CF5 2.5(0.4)	14 MF4 2.8(0.5) CF1 3.1(0.3) MF2 2.2(0.3) CF2 3.4(0.4) MF1 3.4(0.4) CF4 3.1(0.6) MF3 3.3(0.5) CF5 2.8(0.5)	15 MF4 3.8(0.2) CF1 3.1(0.6) MF2 3.1(0.4) CF2 3.5(0.5) MF1 3.0(0.4) CF4 3.1(0.5) MF3 3.3(0.2) CF5 3.1(0.3)

MF4 明朗性 MF2 自己顕示性 CF1 陽気 CF2 わがまま 一多重比較 (ライアン法) P < 0.05-
MF1 内向性 MF3 誠実性 CF4 ねばり CF5 おっとり 見方: ↓ 実線 → ---- 破線

母親	\bar{X}	(SD)	(母→) 子ども	\bar{X}	(SD)
MF1 内向性	3.17	(0.49)	CF4 ねばり	3.20	(0.54)
MF3 誠実性	3.30	(0.45)	CF5 おっとり	2.65	(0.61)

Tab.4-2 は、MF1・MF3/CF4・CF5 を各々全体の平均値以上 (H/h)、未満 (L/l) に分け、母親の場合 LH, LL, HH, HL/母親からみた子どもの場合 hl, hh, ll, lh としてみると、どの位の領域を各々が占めているかをみる事ができる。母親の自己認知では、AタイプとDタイプ、子どもの認知は、aタイプとdタイプが多かった。Tab.4-3 は、これらを組み合わせたものである。Aaが4領域、Ddが3領域ついでCaは2領域を占めた。Aaタイプとは、母親：

Tab.4-2 各々4つのタイプに分けて組み合わせた場合の出方

	タイプ	領域数	MF1 内向性	MF3 誠実性
母親の場合	A	6	L	H
	B	2	L	L
	C	3	H	H
	D	5	H	L
	タイプ	領域数	CF4 ねばり	CF5 おっとり
母から みた子 の場合	a	7	h	l
	b	1	h	h
	c	2	l	l
	d	6	l	h

H, h : 平均値以上 L, l : 平均値未満

Tab.4-3

母親 母→子	HL	LL	HH	LH
hl	A/a	C/a	A/a	C/a
ll	B/d	D/d	B/b	D/d
hh	A/c	D/c	A/a	D/a
lh	A/a	C/d	A/d	D/d

上半分：母親のタイプ，下半分：母からみた子のタイプ

Aa : 4領域, Ac : 1領域, Ad : 1領域

Bb : 1領域, Bd : 1領域,

Ca : 2領域, Cd : 1領域,

Dd : 3領域, Da : 1領域, Dc : 1領域

内向的でなく誠実である、子ども：ねばりがあるがおっとりはしていないという捉え方をしている。これに対し、Ddタイプは、母親：内向的で誠実ではない、子ども：ねばりがなくおっとりしていると認知しているのである。Caタイプも同じようにみていけばよい。

今回、母親と実父母との似より感の違いは、若い母親の養育態度やわが子（幼児）の性格認知とも深いつながりのあることを確かめたと言えよう。性格的な世代間伝達のありようがこの4×4マトリックスから見えてきた。たとえ多くの人数ではないにしても、いまマスコミで取り上げているような問題に迫れるような結果も、領域内をみることで取り出せた。幼稚園にわが子の一人を通わせておられる若い母親の心の中にも、そんな危険性が潜んでいるかもしれない。統計的処理、調査といった大ざっぱな研究手法と、一人ひとりと丁寧にかかわりながら確かめていく臨床的接近を橋渡ししたいと思う35年来の取り組みはまだここまでである。いや、ここまで肉薄してきたといったほうがよいのかもしれない。

理論化への次なる一步：「似よることとズレること」について

6年が経過する中で発酵してきた筆者なりの理論化の道程を、ここにまとめておきたい。

1998年の論文で、「内なる他者」を見つめる目」という用語を提起し、これを『似よることとズレること』という概念とどう結び付けていくのかが現在の大きな課題となってきた。これは、西平（1986）の「〈私〉をどう理解するか」に触発されたものである。ここにもう一度彼の考えを箇条書にして紹介したい。

1. 〈私〉は実体ではない。〈私〉は他人なしには存在しない。
2. 〈私〉とは、〈内なる他者〉との関係である。
3. 〈私〉は、〈関係において〉と同時に〈プロセスとして〉理解されうるのである。
4. 〈私〉は、つねに可能性として存在しているのである。
5. 〈私〉の在り方は、〈私〉それ自身の中にすき間があり、ズレがあるのでなくてはならない。
6. 重要なことは、乗り越えていく〈私〉のみが唯一本物の〈私〉なのではないという点である。そうではなくて、あくまでこの両方のズレを含んだ〈私〉が唯一の〈私〉なのであり、その関係そのものが〈私〉なのである。

彼の言う〈私〉は、どのようにこれから心理学的に位置づけたらよいのだろうか。筆者は、発達臨床学から見た場合、フロイトの「同一視」（無意識の）とは違った『似よることとズレること』の意識化に意味を持たせたいと考えてきた。ここで、西平の〈私〉と「内なる他者」を見つめる目で表現したい内容を、他の心理学者のものと比較させてみることにしたい。

河合（1999）：もう一人の私

私という人間がもう一人いて、そのもう一人の私というのは私の心の中にいて、この私と違うことを考えたり、反対のことをやったりしている。……………生まれてからある程度までの間、どうゆうふうにも包まれ育ってきたかということが問題になる。親以外にはじめて一体だと感じられる人に会ったけれど、本当にこの人は自分を捨てないか、今試そうとしているんだと考えると、その人のやっていることがよく分かる。

「今まで自分は捨てられてばかりだったけれど、とうとう自分を見捨てない、自分をちゃんと抱きかかえてくれる人が見つかった。」

この場合の“もう一人の私”というのは、どうわれわれのものと結び付くのだろうか。彼は、最近「たましい」という概念にも手を出してきた。1990年代に全米を席卷した「魂ブーム」の火付け役、ジェイムズ・ヒルマンは、河合と親交があるという。西平（1997・1998）も自己を超える概念として、しばらくは「魂」を用いると言う。フェルッチ（1990／訳1999）は、“私は魂に敵対していましたが、魂は私を友だちとして待っていることに気付いた。「すべてを受け入れること」が唯一の解決法である（オスカ・ワイルド）。—P.77より—”と書く。二昔前には触れられなかった概念の使用である。この動きは、自己を超えるトランスパーソナルな世界へと続くものといってもよいのだろうか。

人生の過去に目を向けるオーソドックスな考え方としては、パイラント（またはプアリヤント）を取り上げたい。

「防衛機制（心理学ではコーピング方略）」は、さまざまな不安から身を守り、不安を減じるための個々人に特徴的なストレス状況対処法である。その対処法のひとつに「同化」がある。同化によってその人は、ある特別な人の価値観を自分の中に取り入れて、それを手本に行動するようになる。この場合の手本（パーソナリティ・モデル）は、激しい感情を伴う記憶として保持される。この一連の過程を、彼は、「他者を自分の内に取り入れる」と表現する。だれを取り入れたかで、むずかしい状況に直面したとき、どう行動すべきかを告げる内なるメッセージは違ってくる。——ギアラハー P.139 より引用。

早坂（1979）は、メルロ・ポンティをベースにして、次のように述べている。

「発達の変化とは、—（他の人の）パーソナリティの成長とは、といいかえてもよいが—基本的には、「志向的越境」（相手の方向性の中に入りこむこと：早坂注）によって記述され、了解される現象なのである（P.91）。

「ともにいる…」とは、体験的時間を共有することであり、人間が人間を理解することである。……心理学は、これまで空間を問題にしたが、時間にはほとんど無関心であった（p.100）。

ウイルソン（1972／1998 訳）は、健康な精神は〈新鮮さ〉〈他者性〉を必要とする。分裂病とは、ロボット（自動作用）が〈私〉に取って代わっている障害である。自動機械的生活は監禁状態を生み出すと主張している。これらの見解をユングの『個性化』に結び付けていくことは、意義があると考えている。彼は、無意識からのメッセージを意識化することに人生の後半を捧げた人である。“全体性の回復”とはそういうことであった。河合もヒルマンもユング派の研究者である。人生という時間の連続線上に存在し続ける「似よりつつもズレていく」という受け止めがここにおいて意味をもってくる。他者とのかかわりの中で、〈私〉は生まれ、生き続けていく。この〈私〉とは一体何者なのであろうか。「内なる他者を見つめる目」とも置き換えた〈私〉は、自分は自分なのだという自信となり、大切な他者を次々と取り込み融合させていくという、〈関係性〉と〈プロセス〉の問題を包含している。外なる他者が、重要な他者として認知され、さらには内なる他者と化していくとき（似よる時）、〈私〉にとってプラスの面は吸収したいと思っても、マイナスの面を意識して取り込もうとはしないだろう。ただし、無意識のなせる技としてのマイナス的似よりはありうるだろう。

これまでの「似よりつつズレる」という概念は、同一視（同一化）と同一性の間に位置づけ

ようと考えてきたのだが、偉大なる二つの概念をもその視野の中に包含することのできる、もう一回り大きなものに変身させられないものだろうか。もしそうなれば、なんとも大きな夢になる。この線に沿った1994年以來の思考の突然の変化を以下に示しておこう。また、もう一つの臨床分野への応用の事例にも触れてみたい。そこでは、『生起閾値』の立ち上げも可能になるのである。

これまでの研究と理論化は、女子学生から若い母親、女子学生をもつ母親（父親）を対象にした人生中盤・後半に焦点を当て続けてきている。エリクソンが最初の著書でスタートさせたかった「生殖期」の前後に的を絞った一連の研究ということもできる。生涯発達の視座／人生周期的視座から「似よること」と「ズレること」という2つの概念の関わり方を捉えたい。そこで発達の時期を3段階に分け、フロイトの「同一視」、エリクソンの「同一性」それにユングの「個性化」を各々の時期に位置づける。その上で全体を見つめる『似よることとズレること』または、『私』という視点を設けると、どういうことになるのだろうか。人生の第①段階は乳幼児期～児童期、第②段階は青年期～若い壮年期、第③段階を壮年期～老年期に分けて大ざっぱにまずは理解しておきたい（筆者の研究は第②から第③の段階に該当する）。

第①段階：似よることの方にウエイトが置かれる時期である。人生のスタートに近いほど、無意識の「同一視」がはたらくことだろう。

第②段階：似よりつつ、しかも同時にズレも作動しはじめる時期。〈私〉というものが内なる他者を見つめ、融合化させていく。《私》へと高まりながら成長を続けていく。

第③段階：ズレることにウエイトが置かれ始める時期。無意識からのメッセージを意識化させ、一人の独自の存在者としての全体性の回復をはかる。これは、ユングの「個性化」の道を歩むことであり、心内化プロセスを「統合」に、継承化プロセスを「生殖性」へと高めていく。

これを図示したのが、Fig.2である。ここにきてやっと壮年期～老年期にも比重をかけられるところまで視野が広まってきたと感じている。

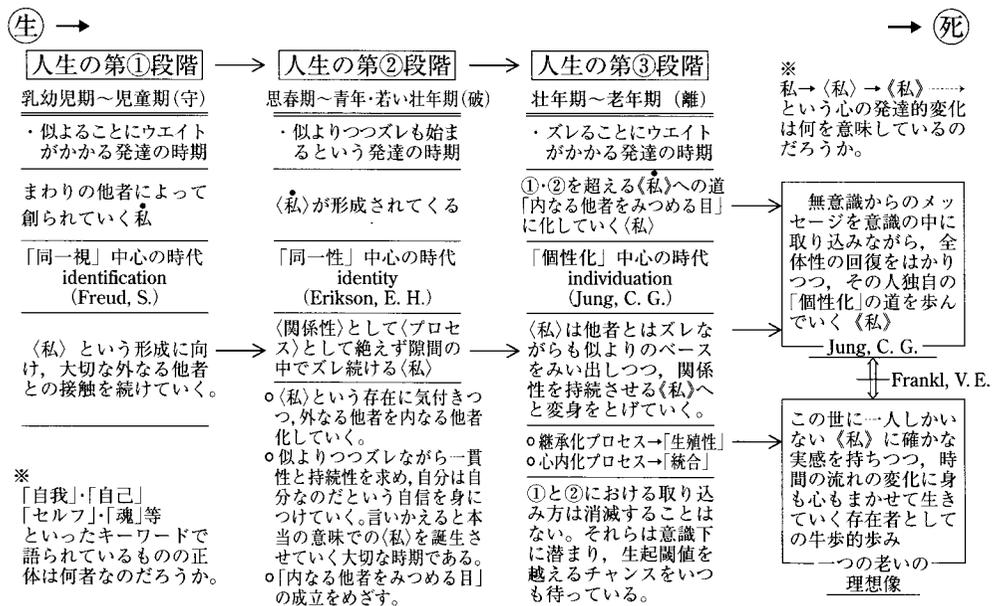


Fig.2 発達の流れの中で、質量ともに変化し続けていく『似よることとズレること』という概念の立ち上げ

過去に目を向け続けたトラウマ理論からの解放を訴える J. ヒルマンの主張、マスロー・A.H. やフランクル・V.E. の研究から大きくうねりだしたトランスパーソナル心理学の台頭に、これからも目を離さず、「今、ここ」での人間のあり方を ヴァン・デン・ベルクの現象学（「見ること」がすなわち学問）による手法で捉え続けていきたいものである。

これからの研究において、ますますその重要性を増すであろう筆者の大切な事例を一つ紹介しておきたい。

一人の女子青年は、母と弟をかばい、父と対峙することで自己を維持してきた。彼女とは何度か話し合う機会があった。そんなある日、彼女は、意識せずに父親の幼児期に触れたのである。第三者である筆者は一言「お父さんは幼い頃寂しかったんだね」と口にした時、彼女はまさに大変身したのである。その後は父と母・弟の橋渡し役に徹することになっていった。この心の変化に父親は喜び、家庭の雰囲気も急変していったのである。彼女は今、立派な家庭を築き、しっかりと子育てに励んでいる（1994a の論文に付記）。

この事例の中には、「似よることとズレること」の意味、『生起閾値』を用いることの可能性が秘められているように思える。河合（1992）のいう“心の勝負は 51 対 49 の場合が多い”にも通じている。無意識をも取り込んだこの二つの筆者なりの概念にはロマンを感じるのである。

親子の世代間伝達を性格認知の面からアプローチする私なりのこの考え方・やり方は、過去をみながら今を踏まえ、そして未来に向かって開かれていく一人ひとりの人生に光をあてることになるのではあるまいか。もしもそうなれば、これほど嬉しいことはない。意味への意志をしっかりと持ちながら生きていこうではないか。もちろん手を取り合いながらの人生の道行きである。大切な〈私〉と大切な「内なる他者」とともに……。

文 献

- 秋山幹男 1968 回避反応におよぼす消去法の効果 広島大学大学院教育学研究科修士論文抄 70-74
秋山幹男 1975 消去期の推移からみた往復回避反応に対する消去法の有効性 異常行動 (PBD) 研究会誌 14 12-21
秋山幹男・堂野佐俊 1981 幼児期における親の養育態度と子どもの性格認知—地域別にみた養育態度— 中国四国心理学会論文集 14 62
秋山幹男・堂野佐俊 1982 幼児期における親の養育態度と子どもの性格認知—出生順位との関係：母親の場合— 日本教育心理学会第 24 回総会発表論文集 80-81
秋山幹男・堂野佐俊 1982 幼児期における親の養育態度と子どもの性格認知（その 3）—父親と母親の比較— 中国四国心理学会論文集 15 66
堂野佐俊・秋山幹男 1982 幼児期における親の養育態度と子どもの性格認知（その 4）出生順位との関係：父親の場合— 中国四国心理学会論文集 15 67
秋山幹男・堂野佐俊 1983 幼児期における親の養育態度と子どもの性格認知（その 5）—出生順位との関係：母親からみた三人きょうだいの場合— 日本教育心理学会第 25 回総会発表論文集 224-225
秋山幹男・堂野佐俊 1984 両親の幼児に対する養育態度と性格認知について (1) —きょうだい数・出生順位・性別構成による分析— 広島文教女子大学紀要 19 39-83
秋山幹男・熊田かおり・洪瀬法子・田中久美子 1987 親と子のつながり（その 1）—母親からみた親子三者間の性格認知について— 広島文教女子大学幼児教育研究会「幼児教育の研究」12 29-48
秋山幹男 1988 親と子のつながり—「活発さ」をもとにした親子三者間の性格認知について— 中国四国心理学会論文集 21 38
秋山幹男 1989 親と子のつながり—4 養育態度の下位項目分析— 中国四国心理学会論文集 22 47
秋山幹男 1994a 教育相談について思うこと—「今、ここで」の大切さとは— (広島文教女子大学) 教育相談センター年報 1 32-45

- 秋山幹男 1994b 「親子の似より」研究の現状とそのパースペクティブ 広島文教女子大学紀要 29 145-169
- 秋山幹男 1996 母親からみた親子（幼児）の性格と養育態度 中国四国心理学会第52回大会発表論文集 81
- 秋山幹男 1997a 母親からみた親子（幼児）の性格の似よりとズレ 日本心理学会第61回大会発表論文集 73
- 秋山幹男 1997b 若い母親の実父母との似より感が親子（幼児）の性格に及ぼす効果 日本性格心理学会第6回大会発表論文集 37
- 秋山幹男 1997c 親子の似より（感）の推移について—女子学生を対象にした4年間— 広島文教女子大学紀要 32 149-163
- 秋山幹男 1998 「内なる他者」を見つめる目 広島文教女子大学紀要 33 103-117
- 秋山幹男 1999 女子学生とその両親が捉えた性格の相互認知—似より感とズレ感をもとにした分析— 広島文教女子大学紀要 34 41-54
- ブーバー・M. 児島 洋訳 1966 出会い—自伝的断片— 理想社 Buber, M. 1960 Begegnung Arrangement with Mr. Rafael Buber, Jerusalem
- エリクソン・E.H. 仁科弥生訳 1977, 1980 幼児期と社会 I・II みすず書房 Erikson, E.H. 1950 Childhood and Society W.W. Norton & Company, Inc.
- エリクソン・E.H. 村瀬孝雄・近藤邦夫訳 1989 ライフサイクル, その完結 みすず書房 Erikson, E.H. 1982 The Life Cycle Completed W.W. Norton & Company, N.Y.
- フェルッチ・P. 平松園枝・手塚郁恵訳 1999 人間性の最高表現 上下 誠信書房 Ferrucci, P. 1990 Inevitable Grace Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo
- フランクフル・V.E. 大沢博訳 1972 意味への意志 プレーン出版 Frankl, V.E. 1969 The Will to Meaning Charles E. Tuttle Company Inc. N.Y.
- ギャラハー・W. 幸田教子訳 1998 なぜ私は [私] なのか 河出書房新社 Gallagher, W. 1996 I.D. Random House, Inc.
- 早坂泰次郎 1979 人間関係の心理学 講談社
- 林 道義 1998 図説 ユング —自己実現と救いの心理学— 河出書房新社
- 岩田慶治 1988 自分からの自由 講談社
- 春日 喬 1999 刺激の質と生体反応 お茶の水女子大学人文科学紀要 52 169-184
- マズロー・A.H. 小口忠彦 監訳 1971 人間性の心理学 産業能率大学出版部 Maslow, A.H. 1954 Motivation and Personality Harper & Row, Publishers, Inc.
- 河合隼雄 1992 こころの処方箋 新潮社
- 河合隼雄 1999 こころと人生 創元社
- 木村 敏 1994 心の病理を考える 岩波書店
- 鯨岡 峻 1986 心理の現象学 世界書院
- 諸富祥彦 2000 心理学者J・ヒルマン氏に聞く「老いを積極的にとらえ直す—トラウマ理論からの解放訴え」 毎日新聞 2000.10.4.
- 村瀬 学 1984 子ども体験 大和書房
- 西平 直 1986 〈私〉をどう理解するか—H.ワロンの〈内なる他者〉を手掛かりにして— 東京大学教育学部紀要 26 197-205
- 西平 直 1997 魂のライフサイクル 東京大学出版会
- 西平 直 1998 魂のアイデンティティ 金子書房
- 中村雄二郎 1997 NHK教育「未来潮流」自分とは何か?—生命哲学が問い掛けるもの— 1977.1.4. 放送
- 霜山徳爾 1978 人間の詩と真実 —その心理学的考察— 中央公論社
- 内山興正 1990 御いのち抄 柏樹社
- Vaillant, G.E. 1971 Theoretical Hierarchy of Adaptive Ego Mechanisms —A 30 year Follow-up of 30 Men Selected for Psychological Health— Archives of General Psychiatry 24 107-118
- Vaillant, G.E. 1976 Natural History of Male Psychological Health —V. The Relation of Choice of Ego Mechanisms of Defense to Adult Adjustment— Archives of General Psychiatry 33 535-545
- Vaillant, G.E. & Drake R.E. 1985 Maturity of Ego Defenses in Relation to DSM-III Axis II Personality Disorder Archives of General Psychiatry 42 597-601
- Vaillant, G.E., Bond, M. & Vaillant, C.O. 1986 An Empirically Validated Hierarchy of Defense Mechanisms

資 料

	はい	時々は	いいえ
保 護			
子どもが一人でできることもつい手伝ってやりがちですか。	6.4	41.7	51.9
子どもの身の回りのことを黙って見てもらえないで干渉しがちですか。	19.3	55.6	25.1
子どものけんかや遊びに親が口を出しますか。	4.7	60.3	34.9
幼稚園や保育所(園)のことをねほりはほり聞きますか。	5.1	38.0	56.9
子ども一人では遠くに行かせないようにしていますか。	63.7	9.5	26.8
手の汚れや衣服の清潔など衛生についてやかましく注意しますか。	40.0	44.4	15.6
子どもが病気になったり、けがをすると非常に心配でろうばいしてしましますか。	12.9	30.8	56.3
子どもが危険な遊びをしているのではないかと気になりますか。	18.6	52.5	28.8
拒 否			
子どもの相手をするのがとかく面倒くさい方ですか。	7.5	62.4	30.2
子どもの欠点ばかりが目について気になりますか。	15.6	45.4	39.0
子どもの要求や約束に対して忘れてたり、無関心だったりしますか。	2.0	42.0	55.9
子どもが話しかけた時「忙しいからね」などと言って、話相手にならなかったりしますか。	5.1	72.2	22.7
いらいらすると子どもに当たり散らしますか。	17.6	70.8	11.5
よく子どもを叱りますか。	43.4	43.4	13.2
子どもを叱る時、たたくとか、つねるとかいうような体罰を用いますか。	30.2	56.6	13.2
子どもと一緒に外出したり遊んだりしますか。(一)	2.4	35.3	62.4
支 配			
親が良いと思うことは、子どもにどうしてもやらせがちですか。	28.5	47.5	24.1
しつけについてはやかましく言い過ぎると思いますか。	27.5	47.8	24.7
日課はきちんと決めてあって、それを厳守させるようにしていますか。	24.9	32.4	42.7
親の思いどおりにさせようとしていますか。	9.8	39.7	50.5
よその子と比べて気にする方ですか。	15.3	35.6	49.2
良い本、よい玩具など出来るだけ良いものばかり与えようと苦心しますか。	16.9	30.8	52.2
子どもの将来について計画を立て、なんとかして目標に到達させたいですか。	16.6	10.5	72.9
子どもはもっとやればできるのに努力していないように思う。	17.3	28.8	53.9